

来年のNHK大河ドラマは「葵三代」で徳川家康、秀忠、家光の三代を取り上げるそうです。苦難の時代のリーダー像を描くそうですが、地元静岡でもまたブームが起きることでしょう。家康といえばこの言葉、感じるところの多い教えです。

『人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし。  
急ぐべからず。

不自由を常と思えば不足なし。

心に望みおこらば困窮したる時を思いだすべし。

堪忍は無事長久の基。

怒りは敵と思え。

勝つことばかり知って負けることを知らざれば害その身に至る。

己をせめて人を責むるな。

及ばざるは過ぎたるより勝れり。』

東照宮御遺訓より

< 第 4 3 回 ほほえみの会 >

年が明け寒風吹きすさぶ中、新会員を含め 11 人が出席しました。

入院して 3 ヶ月。子どもの病気を知ったときのショックに比べ、親の気持ちはだいぶ落ち着いて楽になってきたが、治療が終わった後の子どもの生活がどうなるのか不安ということでした。

これに対しては参加した人達から様々な意見が出されました。

- ・ 3 ヶ月でそこまで気持ちの整理ができるのは立派
- ・ 発病して 3 年、末梢血幹細胞移植をして今は元気で学校に通っている。学校でも他の子と同じようにしていて心配はない。
- ・ 幼稚園入園で願書に病名を書いたら断られ、遠い幼稚園に入園した。体力的には劣るが同じ事はできる。

- ・ 小学校では養護の先生と担任の先生には事情をよく話した。すると特別に面倒を見てくれた。先生によっても個人差はあるが理解は大きかった。
- ・ 骨髄移植という大変な治療をした後なのでその治療の副作用と思われる病気もしているが一つ一つ目の前のハードルを越えている。

また、骨髄移植をして 1 年 4 ヶ月経ち元気なんだけど、咳が出たり顔色が悪かったりするとつい悪い方に考え込んでしまう。辛い治療を乗り越えてきたことに感謝したいということはわかっていてもつい神経がピリピリしてしまう。

これに対しても、あまり神経質にならずなるべく子どもが楽しいことをさせたという体験談が出ました。

子どもの病気は注意していても悪くなるときには悪くなる。それは病院の先生に任せ、家にいるときにはなるべく楽しいことをさせ笑顔をいっぱいにして本人の免疫力を高めるようにした。

白血球が低くても車で山に登ってお弁当を食べたりした。それだけで子どもは気分転換になり食欲も出た。

聖路加病院の細谷先生も子どもは遊びたい盛りなのでその気持ちを抑えないで、少々具合が悪くても好きに遊ばせた方がいいと言っているそうです。

兄弟の問題も話題となりました。

最初は兄弟も納得していても時が経つにつれ、どうしても病気の子に目がいくので他の子ども達がぎくしゃくしてくる。

どこの家でも兄弟は多かれ少なかれ精神的に大変になる。

入院するときに主治医の先生から「病気の子ががんばっているからあなた達もがんばりなさい」とは言わないように注意されたが、兄弟にとっても寂しい思いをしてがんばっていることを親は忘れないようにしたい。

小さい子なら夜だけでも一緒に寝てやるのも良いのではないかな。

次回は 2 月 1 4 日 ( 日 ) 時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一